

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23653198

研究課題名(和文) 文化的・社会的要因がADHD傾向のある大学生の支援ニーズに及ぼす影響

研究課題名(英文) Impacts of cultural and social factors on support needs of students with ADHD.

研究代表者

高橋 知音 (TAKAHASHI, Tomone)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：20291388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本の高等教育機関で、発達障害のある大学生が増加しているがADHDのある学生は少ない。自己評価したADHD傾向自体には日米間で差がなかったことから、支援ニーズの強さにはソーシャル・サポートの影響が大きいのではないかと考えた。そこで日本人大学生において、ソーシャルスキルがADHD的傾向と大学適応感との媒介変数として認められるか検討した。大学生81名を対象に、ADHD的傾向について、質問紙と認知機能検査課題により測定し、ソーシャルスキルと大学への適応については質問紙で測定した。その結果、質問紙、認知機能検査課題ともにソーシャルスキルを媒介として大学適応に影響を及ぼすことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Although the number of students with developmental disabilities is increasing in Japan, most of them are students with autism spectrum disorders (ASD). The number of students with attention deficit disorders (ADHD) is small compared with the students with ASD. We interviewed students with high scores on ADHD scales and found out that their support needs were not so strong. One of the reasons for the small support needs was that they received social supports from peer, family members, and teachers. Therefore, it was assumed that social support took an important role in adjusting to campus life. In order to test the hypothesis, the relationship among ADHD traits, performance on continuous performance task, social skills, and adjustment to campus life was examined. Participants were 81 undergraduate students. The results showed that social skills mediated the effects from ADHD traits and performance on continuous performance task.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ADHD 大学生 ソーシャルサポート ソーシャルスキル 支援ニーズ

1. 研究開始当初の背景

大学における発達障害のある学生の支援は、障害学生支援に関する国際学会、米国学会においても主要なテーマとなっている。我が国でも近年その取り組みが本格化し、心理系、特別支援教育系、医療系の学会で多くの報告が行われるようになった。

こうした中、米国では学習障害、注意欠陥多動性障害 (ADHD) が支援対象の中心となっているのに対し、我が国では自閉症スペクトラム障害に関する報告が中心で、ADHD に関するものは限られている (たとえば篠田・田中, 2004 など)。申請者は大学生の ADHD 傾向 (注意関連の認知機能の弱さ) に関する尺度を開発 (高橋・篠田, 2001) し、高得点者との面接を行ったが支援へのニーズは高くなかった。支援を求めない理由として、仲間、家族、教員からの支援をあげるものが多かった。自己評価した ADHD 傾向自体には日米間で差がなかった (Davis, Takahashi, & Shinoda, 2008) ことから、支援ニーズの強さにはソーシャル・サポートの影響が大きいのではないかと考えた。

2. 研究の目的

米国において、Shaw-Zirt et al. (2005) は、ADHD の診断がある学生が、そうでない学生よりも自尊心、ソーシャルスキル、大学生活における適応感のいずれも低い値を示すことを報告した。さらに同研究では、ADHD そのものが大学適応感に直接影響を与えるだけでなく、自尊心を媒介として間接的にも影響を与えることを示した。一方、ソーシャルスキルは ADHD と大学適応感との媒介変数として認められなかった。

しかし、ソーシャルスキルに関する多くの研究で、スキルがある人ほど心理的健康や生活における適応が高まることが示されている (堀・島津, 2005 など)。また、ADHD はスキルを遂行することに困難を持ちやすいとされている (Wheeler & Carlson, 1994 など) ため、ADHD 的傾向をもつ学生のソーシャルスキルの欠如は大学での不適応につながるものと思われる。言い換えれば、彼らのソーシャルスキルを高めることが、大学での適応にも正の影響を与えるのではないだろうか。そこで、ソーシャルスキルが ADHD 的傾向と大学適応感との媒介変数として認められるか検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 調査参加者

大学生 81 名 (男性 26 名, 女性 55 名)

(2) 材料

ADHD 傾向質問紙 (簡易版)

高橋・篠田 (2001) が作成した ADHD 傾向質問紙の中から DSM- の診断基準に示される 18 項目を抽出し、ADHD 傾向質問紙 (簡易版) として用いた。回答は 4 件法。

KiSS-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items)

菊池 (1988) が開発した KiSS-18 を使用した。合計 18 項目であり、回答は 5 件法。

メタ・ソーシャルスキル尺度

石井 (2007) が作成したメタ認知尺度を使用した。合計 10 項目であり、回答は 4 件法。石井 (2007) は、メタ・ソーシャルスキルの下位尺度としてメタ認知尺度を作成しているが、この場合でのメタ認知をソーシャルスキルに特化したメタ認知と考え、本研究では「メタ・ソーシャルスキル尺度」として使用した。

大学環境への適応感尺度

大久保・青柳 (2003) が作成した大学生用適応感尺度を使用した。合計 29 項目であり、回答は 5 件法。

Integrated Visual and Auditory Continuous Performance Test (IVA-CPT) 学生の認知機能を測定するため IVA-CPT を使用した。これは、視覚と聴覚の 2 つの感覚モダリティを用いて、主に注意と反応制御の機能を評価する課題であり、5 歳から成人までの ADHD の診断に役立てるために作成されたものである。実施にはコンピュータを利用した。課題の成績には指数を算出した。

4. 研究成果

(1) 結果

データ不備のあった男女 2 名を分析から除外した (平均年齢 21.3 歳, 標準偏差 1.92)。まず、質問紙で測定された ADHD 傾向を独立変数、大学適応感を従属変数、メタ・ソーシャルスキル、ソーシャルスキルを媒介変数と仮定し、重回帰分析を利用したパス解析を行った。その結果、ADHD 傾向からメタ・ソーシャルスキルへのパス、メタ・ソーシャルスキルからソーシャルスキルへのパス、ソーシャルスキルから大学適応感へのパス、ADHD 傾向からソーシャルスキルへのパス、ADHD 傾向から大学適応感へのパスがいずれも有意であった。このことから、ADHD 傾向が大学適応感に直接的な影響を及ぼすだけでなく、メタ・ソーシャルスキルやソーシャルスキルを媒介として間接的にも影響を及ぼすことがわかった。

次に、IVA-CPTの各指数を独立変数として同様の分析を行った。その結果、聴覚反応制御指数、聴覚注意指数からメタ・ソーシャルスキルへのパスが有意であった。また、聴覚注意指数についてはソーシャルスキルへのパスも有意であった。大学適応感への直接的なパスはいずれのIVA-CPT指数も有意ではなかった。このことから、聴覚における反応制御は、メタ・ソーシャルスキル、ソーシャルスキルを媒介として大学適応感に間接的な影響を及ぼすことがわかった。また、聴覚における注意に関しては、メタ・ソーシャルスキル、ソーシャルスキルを媒介として大学適応感に間接的な影響を及ぼすと同時に、ソーシャルスキルにも直接的な影響を及ぼすことがわかった。

(2)考察

ADHD的傾向がメタ・ソーシャルスキル、ソーシャルスキルを媒介として大学適応感に影響を及ぼすことがわかり、ソーシャルスキルがADHD的傾向と大学適応感の媒介変数として成り立つことが示された。したがって、ADHD的傾向を持つ大学生のソーシャルスキルを高めることによって、彼らの大学での不適応感を低減させることができることが実証された。本研究でソーシャルスキルがADHD的傾向と大学適応感の媒介変数として認められた理由としては、米国と日本の生活スタイルの違いが関係していると考えられる。独立した個人を尊重する文化である米国と異なり、日本は周りとの調和・協力を重んじる文化である。したがって、他者と良好な関係を築く上で欠かせないソーシャルスキルがないことが、そのまま不適応感につながりやすいのではないかと考えられる。

さらに、IVA-CPTの聴覚反応制御指数、聴覚注意指数において、メタ・ソーシャルスキル、ソーシャルスキルを媒介として大学適応感に有意な影響を及ぼすことがわかった。まず、聴覚反応制御指数が低いほどメタ・ソーシャルスキルも低くなりやすいことが示された。聴覚反応制御指数が低いということは、聴覚的な刺激に対する反応抑制（衝動性のコントロール）に問題があるだけでなく、思慮のなさや過剰反応性を表す。したがって、このような特徴のある者は、ソーシャルスキルを行使するまでのメタ認知過程において、耳から入る様々な情報によって容易に気が散りやすいため、冷静かつ的確に周りの状況を読み取ってスキルの行使・非行使を判断することができなくなってしまうと考えられる。

次に、聴覚注意指数が低いほどメタ・ソーシャルスキル、ソーシャルスキルがいずれも低くなりやすいことが示された。聴覚注意指

数が低いということは、そもそも聴覚的な注意力に問題があることや、注意力を保って物事を処理していくことが困難であるということを表す。したがって、このような特徴を持っている者はまた、ソーシャルスキルを行使するまでのメタ認知過程において、耳から入る様々な情報を聞き落してしまいやすく、自らが置かれた状況を的確に読み取ることが難しくなってしまうと考えられる。また、相手の話を聞き漏らしてしまったり会話内容を忘れてしまうことによって、スキルを行使する時機を逸しやすくなり、結果的にメタ認知過程だけでなくソーシャルスキルの行使にも直接的に負の影響を及ぼしていることが考えられる。

(3)まとめ

本研究の結果から、ADHD的傾向をもつ学生のソーシャルスキルを高める支援の必要性が示唆された。しかし、注意機能の特徴がソーシャルスキルに及ぼす影響はそれぞれ異なることがわかり、支援に際して彼らのADHD的傾向をより詳細にとらえることが大切であると思われる。また、ADHD的傾向を持つ学生は、メタ認知過程の段階でもつまずきやすい傾向があることが示唆された。このため、支援を行っていく際にも、状況の読み取りからスキルの選択までのプロセスを実践の中で理解してもらうようなアプローチが大切であると思われる。

また、実際にソーシャルスキルに弱さを持つ大学生は少なくないことから、ADHD的な傾向を持って、潜在的に支援ニーズのある大学生は日本国内でも少なくないと思われる。今後、ADHD困り感質問紙を用いて、そうした潜在的ニーズを拾い上げ、支援につなげていくことも重要であると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

Tomone Takahashi & Misa Iwabuchi: "Developing support needs assessment instruments for students with attention-related difficulties in higher education." Eighth International Conference on Higher Education and Disability. (20130722-20130726). University of Innsbruck

首藤 悠介・高橋 知音: "ADHD的傾向が大学適応感に及ぼす影響～ソーシャルスキルを媒介変数として～" 日本LD学会第21回大会. (20121006-20121008).

仙台国際センター

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高橋 知音 (TAKAHASHI, Tomone)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：20291388